

コミュニケーションとしてのことば

小 林 泰 秀

Language for Communication

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

In this paper I attempt to answer the following fundamental questions. What is human language? Why can't an animal acquire human language? How are human language and animal languages different from each other? What does it mean to say that a human knows his language? After discussing these problems I conclude that human language is unique to humans.

1. は じ め に

我々がコミュニケーションの手段として使っていることばとは、いったいどのようなものであろうか。本稿では人間言語の本質について議論したい。

人間はだれでも少くとも一つの言語を知っている。ジャズ音楽を知っている人や、理論物理学を知っている人や、モダンダンスを知っている人などは、互いにその知識について語り合うことがあるが、日常生活で我々は言語知識について互いに語り合うことはしない。人間は言語については専門家であるにもかかわらず、それではなぜ持っている知識について興味を示さないのであろうか。それは、人間の持っている言語知識は無意識のうちに備わったものだからである。我々は自然に備わった能力について話し合うだろうか。例えば、「私はこうしたら歩けるようになった。」とか、「私はこうしたらうまく服が着れるようになった。」などとは、正常な発達をした普通の健康な人間は話さない。それと同じように、我々がある言語環境に置かれたことによって習得した言語そのものについては関心がないのである。ことばについて関心を

本稿は1988年11月5日に行われた広島女学院大学公開セミナーで発表した「ことばの真髄を求めて」に若干の修正を加えたものである。なお言語習得のところで述べた「相互作用」に関しては、紙面の都合上本稿では削除したことをおことわりしたい。

示す時には、声が低いとか、歯が抜けてうまく話せないとか、色々な方言の特徴などのように、言語の習得後にもち上った問題についてである。

2. 言語使用の創造性

我々人間に無意識に備わった、互いのコミュニケーションを可能にらしめる言語能力とはいったいどのようなものであろうか。

言語学者のノーム・チョムスキーは、人間の持つ言語能力のことを「言語使用の創造的な面」と呼び、人間に固有の性質だと述べている。言語の創造的な面として、彼は三つの特質を挙げている。(Chomsky: 1982a)

一つは、人間の正常な言語使用は改新的だということである。我々は日常生活の中でいろいろな文を聞いているが、その多くのは以前一度も聞いたことのない文であるにもかかわらず、理解することが出来る。又、我々の話す文も以前聞いたことのある文のくり返しではなく、以前自ら発したことのない新しい文が多い。このように我々は以前聞いたことのない文を理解出来、以前話したことのない文を発するという意味で、改新的である。従って、我々が難かしさや奇妙さを感じないで、即座に理解出来る母国語の文の数や自ら造り出して話せる文の数は、天文学的だと言えよう。

我々は詩歌をたしなむことがあるが、以前使ったことのない新しい文を創造しており、それによって新たに自分の感情を表現しようとする。その時に考えるのは、何を、どのような表現を用いて描写しようかであって、どんな難しい単語を使おうとか、どんな文型で書こうかではない。一方英語で作文を書く場合には、語学力がないために幼稚な作文になってしまう。言語使用の創造性は、母国語には強いが、第2言語については、個人差があるにしても、かなり弱いものになってしまう。

人間の言語使用が改新的なのは、次の奇妙な二つの文からも分る。

(1) ある外国の王女が、飛行機でヘルシンキから東京へ向かう途中、スチュワードが持ってきたトナカイのすき焼を食べて、それが原因で妊娠したとあって、その航空会社を相手に父親認知訴訟をおこした。(Steinberg: 1982. 日本語訳は国広・鈴木共訳: 1988より)

(2) アビ丸選手は、市民球場でめがねをかけたゴリラとひげをきれいに剃ったかばが、赤いユニフォームを着、青の野球帽をかぶって楽しくキャッチボールをしているのを見てから、野球選手になる決心をした。

以上の二つの文はもちろん以前に聞いたことはなく、全く奇妙であり、信ずることは出来な

いが、理解するのは難しいことではない。

音声だけが我々のコミュニケーションの手段ではない。生まれつき耳の聞こえない人や口の言えない人は手話を覚えるが、それは話しことばと同じように創造的であり、複雑であり、改新的である。耳の聞こえない子供は、周囲で使われている手話を単に見ているだけで手話を習得し、更には、今まで見たこともない文を手話で造り出すことが出来るようになる。これは人間の発する音声を聞く能力のある者だけが、言語を使えるのではないことを表わしている。人間は一つの言語環境に置かれると、手話でであろうが、音声を使ってであろうが、その言語を習得する能力を持って生まれてきたのである。

人間言語の第2の特性として、正常な言語使用は刺激の統制から自由であることが挙げられている。我々の発する文は、何らかの刺激を与えられた場合に引き起こされる反応だけによるものではない。もちろん我々は誰かに足を踏まれると「痛い。」と叫ぶし、車が急に来たら「危い。」と叫ぶであろう。又、感情が高ぶれば泣きわめくことをしたり、怒鳴りちらすこともある。こういう場合に発する音声は、無意識的な反応ではあるが、刺激—反応のしくみから成り立っているとも言えよう。しかし我々が文を発する時には、通常人から強要されて言うのではなく、あくまでも自分の考えや自己を表わす自由な道具として言語を使っている。例えば、誰かに足を踏まれて「痛い。」と大声で叫んだ後、相手がていねいに謝ったのを見て、「いやあ、痛くありませんよ、この位。大丈夫です。」と静かに、そして自分の感情と反対のことや嘘を言うことも出来る。

人間言語が刺激の統制から自由である他の例として、我々が未来について語ることが出来ることが挙げられよう。全く自由に自分の将来に対する希望などを人に語ることも出来る。昔に比べると現在は、子供が親へ、学生が教師へ、あるいは女性が男性へ自分の考えをはっきりと述べるようになったが、これは自分の人間性の主張、つまりは自分が統制から自由であることの主張に違いない。そうなると、人間の自由と言語の自由は関連があると言えよう。

チョムスキーの言う三つ目の人間言語に固有の特性は、人間は新しい状況に適した新しい表現を作り出すことが出来ることである。一個人の話すことばも、どのような相手に対して、あるいはどのような状況に於いて話すかによって大いに異なるであろう。我々は新しい状況に適切に回答出来る言語能力を持っている。この状況に対する適合性の問題は、談話の文法として最近の語用論で活発に取り上げられている問題である。最近翻訳の機械の開発が進み、将来同時通訳として重要な役割を担うことが期待されているが、一番大きな問題は文脈に適した翻訳が出来るかどうかである。

次の(3) a.~e. のようなあいまい文を見てみよう。

(3) a. She cannot bear children.

- ① 彼女は子供が生めない。
- ② 彼女は子供にがまん出来ない。

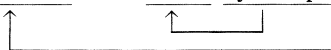
b. Flying planes can be dangerous.

- ① 飛んでいる飛行機は危険だ。
- ② 飛行機を飛ばすことは危険だ。

c. The shooting of the gangsters was terrible.

- ① ギャング共が発砲したのは恐ろしかった。
- ② ギャング共を撃ったのは恐ろしかった。

d. The Mafia wants protection from attack by the police.



(Fromkin & Rodman: 1978)

- ① マフィアは、襲撃されないように警察が自分たちを守ってくれることを望む。
- ② マフィアは、警察による襲撃から自分たちを守ってくれることを望む。

e. Mary doesn't talk to John because she **DISLIKES** him.



- ① It is because she dislikes him that Mary doesn't talk to John.
(メアリーがジョンに話しかけないのは、彼が嫌いだからだ。)
- ② It is not because she dislikes him that Mary talks to John.
(メアリーがジョンに話しかけるのは、彼が嫌いだからではない。)

(3)a. は語彙によるあいまいさであり, b. c. d. は文構造の違いによるあいまいさであり, e. はイントネーションによるあいまいさである。e. のイントネーションの違いは, 矢印で示してあるように, ①の意味では **DISLIKES him** の所が下降調 (Falling Intonation) になっており, ②の意味では上昇調 (Rising Intonation) になっている。(3) a.~e. のように二つの解釈が出来るあいまい文に対して, 翻訳機械は一回の作業に於いてどちらか一方の訳しか出来ないことになっていて, 状況に応じて適切な訳を選択するというようなことはまだ出来ない。一方人間は, ある文脈の中であいまい文を聞いた時に, 頭の中で二つの意味解釈をし, そのうちの一つを文脈に応じて選択するというような作業はしない。自ずからある文脈では一つの解釈しかしないのである。

3. 言語の習得

3-A. 経験論対合理論

人間はどのようにしてことばを獲得するのかという問題については、人間がいかに知識や信念などを獲得するかをめぐり、経験論と合理論の論争が古くからなされてきた。

経験論の立場に立つ者は、人間の精神は生まれた時は白紙状態に等しく、後天的な経験を通じて知識や信念を得ると考える。ことばの獲得にしても、人間は後天的に言語に接し、始めてその言語を習得すると考える。狼に育てられた人間が、発見された時に一言も人間言語を話さなかったのがその一例と言えるであろう。

一方合理論の立場に立つ者は、我々の知識や信念の大部分は経験から生ずるのではなく、生得的に精神に組み込まれたものであり、それが外界からやってくる一定の経験と相互に作用し合って、発めて機能したり働いたりすると考える。つまり、経験はことばの獲得にはどうしても欠かせない要素ではあるが、その役目は知識を作り上げたり形作ったりするのではなく、むしろ生まれつき人間に備わっていて、まだ奥にひそんでいる知識を活性化することにあると考える。従って、ことばの獲得も同様に、人間は先天的に言語を習得する能力を持って生まれてきたから出来ると考える。筆者は経験よりも合理論の立場に立ちたい。それは、前に人間には創造性があると述べたが、有限な経験から無限の観念が生まれることはないからである。

次の例 (Chomsky: 1980) を見てみよう。

- (4) a. who do you wanna meet?
 b. [who_i do you want to meet t_i]
- (5) a. *who do you wanna meet Bill?
 b. [who_i do you want t_i to meet Bill]
- (6) a. who do you wanna visit?
 b. [who_i do you want to visit t_i]
 c. *[who_i do you want t_i to visit]

a. の各文の who は、b. と c. の t_i (trace「痕跡」) の位置から移動したものである。(4) a. と(6)a. の who は、それぞれ meet と visit の目的語の位置から移動したものである。(5) a. の who は意味的には meet Bill の主語であり、want と to の間の位置から移動したものである。want to が wanna に縮約出来るのは、その間に trace がないことが前提となる。(6) a. の構造は (6) b. であって、(6) c. ではないのも同じ理由からである。

さて、このような抽象的な原則は、経験によって感じ取れるものだろうか。幼児は

want+to が wanna に縮約されるということを学習するのは容易であろう。しかし、この縮約がなんらかの要素が移動された位置をはさんでは適用されないということが、経験によって確立されると考えるのは、難しいように思われる。

次の例も縮約形のものである。

- (7) a. She has/She's flowers in the garden.
 b. The flowers which_i she has/*she's t_i in the garden.
- (8) a. Though John is/John's easy to please, I don't like him.
 b. Easy_i though John is/*John's t_i to please, I don't like him.
- (9) a. Do you think he is/he's very good at baseball?
 c. How good_i do you think he is/*he's t_i at baseball?

(7) ~ (9) の例の a. の文にはある要素の移動はないが、b. の文では which, Easy, How good がそれぞれ t_i の位置から移動されている。b. の文のように、移動が行われた際には、t_i の前の she has, John is, he is は she's, John's, he's のように縮約されない。このようにある要素が移動されるとその前の語句が縮約されないという抽象的な原則も、経験によって確立されるとは思われない。

3-B. 幼児の文法

チョムスキー (Chomsky, 1980: 134) は次のように述べている。

- (10) ...knowledge of grammar, hence of language, develops in the child through the interplay of genetically determined principles and a course of experience. (文法の知識、したがって言語の知識は、遺伝的に決定された原理と経験の過程との相互作用を通して幼児に発達する。)

...I would like to suggest that in certain fundamental respects we do not really learn language; rather, grammar grows in the mind. (ある根本的な点に於いて、我々は実は言語を学習するのではなく、むしろ文法が精神に於いて成長すると、私は提唱したい。)

筆者は、身体の器官が成長するように、文法が成長するということに注目したい。幼児は複雑な文法規則をある日とつぜん覚えるということではなく、言語は段階的に習得され、段階が進むにつれて少しずつ成人言語の文法に近づくようである。幼児が簡単な規則から複雑な規則の習得へと段階的に進んで行くのが、次の否定文の例にも見られる。

- (11) a. No want some food.
 b. I no/don't want some food.

c. I don't want no food.

d. I don't want any food.

(Fromkin & Rodman: 1978)

幼児は大人の文法を入力としながらも、大人のとは違った独自の文法を作り上げている立派な言語学者だと言わざるを得ない。

次の例は幼児の文法を反映するものである。

(12) a. Where my mitten? (僕の手袋はどこ?)

b. What me think? (僕は何を考えているの?)

c. What the dollie have? (そのお人形が持っているものは何?)

d. Why you smiling? (なぜ笑ってるの?)

e. Why not he eat? (なぜあの人は食べないの?)

f. Why not...me can't dance? (なぜ……ダンスしてはいけないの?)

g. Why you see seal? (なぜお母さんはアザラシが見えるの?)

h. Why not me careful? (なぜ僕は注意していなかったの?)

i. No...wipe finger. (指をふく……ない)

j. No a boy bed. (男の子のベッドない)

k. No...singing song. (歌うたって……ない) (以上 McNeil: 1970)

l. goed, comed, falled, breaked, sheeps, mouses, gooses.

wh- 疑問文は、平叙文の文型をそのまま保ちながら、文頭に wh- 語を付加して作られている。幼児にとってはこのような文は間違いではなく、ある発達段階での幼児の文法を反映している。又、(12) l. の過去形と複数形は、すでに習得した規則をもとにして作られた類推である。幼児の文法も良く見てみると、大人の文法にかなり似ていることが分かる。英語の SVO の型がすでに確立されており、過去形・複数形の類推にしても、大人の文法の確立にあると言えよう。

幼児は無意識のうちに言語を習得し、そして無意識のうちに独自の文法を造り出しているため、大人が強制的に訂正させようとしても、自分が何を間違っているのか分からないので修正出来ない。次の (13) の例では子供の言う Nobody don't like me を母が Nobody likes me になおそうとしており、(14) の例では子供の other one spoon を父が the other spoon になおそうとしている。

(13) Child: Nobody don't like me.

Mother: No, say "nobody likes me."

Child: Nobody don't like me.

(dialogue repeated eight times)

- Mother: No, now listen carefully; say “nobody likes me.”
Child: Oh, nobody don’t likes me. (ibid.)
(14) Child: Want other one spoon, Daddy.
Father: You mean, you want “the other spoon.”
Child: Yes, I want other one spoon, please, Daddy.
Father: Can you say “the other spoon”?
Child: Other...one...spoon.
Father: Say...“other.”
Child: Other.
Father: Spoon.
Child: Spoon.
Father: Other...spoon.
Child: Other...spoon. Now give me other one spoon.

(Fromkin & Rodman: 1978)

以上の(13)と(14)の例のように、大人はいくら子供のことばを修正しようとしても失敗に終わっている。大人のことばは幼児が模倣するための手本として役立っていないのである。模倣では説明のつかない語や文を作り出すことから、新しい文を組み立てるための規則が幼児の心の中に作り上げられていると言えよう。幼児は周囲のことばを聞きながらも、模倣のくり返しだけが続けていくのではなく、それぞれの発達段階に於いて独自の文法を創り出しながら、徐々に大人の文法に到達するように生まれながらに仕組まれていると考えられる。

4. 動物の「ことば」と人間言語

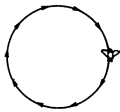

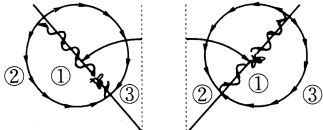
4-A. 動物のことば

ことばが単にコミュニケーションの手段として考えられるならば、人間言語も動物のことばも大差はないであろう。多くの動物は独自の信号や合図をもって意志を伝えているようである。犬や猫を飼っている者であれば、その鳴き声からかなり意味が分かるであろう。新妻昭夫氏(1979)が述べているように、犬は遊びたい時は遊びを誘うおじぎをするし、服従の時はうずくまって体を小さく見せようとし、更に服従の度合が強くなると前足を上げ体を横転させるし、攻撃的になると体を大きく見せ、毛を逆立たせる。相手が自分より弱いとみるとにらみつけて威嚇し、強い相手には視線が合うのを避けて服従の意志を伝える。又、表情は、恐れや服従の時には耳が後方に倒され、くちびるが水平に後ろに引かれて服従の姿になり、攻撃性が強くな

ると耳がピンと直立し、毛も逆立ち、口が前へ押し出されてくちびるが持ち上げられ、歯がむき出しになる。更に新妻昭夫氏によると、犬には7種類の音声と2種類の機械音が記録されている。シュウという子犬が空腹の時に発する音、鼻をプーブーならす犬同志が挨拶をする時に聴かれる音、鼻をクンクンいわせる声、苦痛をおぼえる時や服従の時に発せられる金切り声、遠吠えや唸り声、それに機械音としては、歯をカチカチいわせる音が威嚇や防禦、遊びを誘う行動とともに聴かれ、息切れの機械音が遊びを誘う行動とともに聴かれる。犬の信号がどのような社会的意味を持ったものとして使われているのかははっきりしないが、コミュニケーションの手段として使われていることは確かである。又、猫を飼っている者なら、ふつうのニャーオという声、金切り声、うなり声、のどを鳴らす音、フーッと背をまるめて発する声やシュツという声は聞いたことがあるであろう。又、日本猿は30種類の叫び声を使いわけ、喜び、怒り、群を統率するために必要な指示などを表わすと言われている。

蜜蜂のことばは犬や猫などより複雑である。食べ物を探しに行って戻って来た蜂が、仲間にその食べ物のありかについての情報を伝達する時、次のような三つの型のダンスをする。

(15) 蜜蜂のダンス

ダンスの型		距離	活発さ	食料の位置と太陽との角度	1分毎の反復回数
円舞		20フィート以内	食料の質		
鎌型		20~60フィート	食料の質	食料の方向	
尻振り		60フィート以上	食料の質	食料の方向	食料への距離

蜂は食べ物までの距離によって一つの型を選ぶのだが、どのダンスをするにも巣箱内の単板に止まり、踊るように歩いて色々な型を作る。円舞は食べ物が巣から20フィート以内にあることを示し、鎌型は20~60フィート、そして尻振りダンスは巣から60フィート以上の所に食べ物があることを示す。

円舞は(15)の図のように円を描き、その動作が活発であれば質の良い食べ物があることを意味する。この活発さはすべての型に共通のものである。鎌型ダンスと尻振りダンスは、それぞれ図に示したような踊りをするが、太陽と巣を結んだ線と、食べ物と巣を結んだ線で作られる角度を示すことにより、食べ物が巣からどの方角にあるかを伝える。例えば、ダンス軸の傾きが左に30度であれば、食べ物が太陽から左30度の方向にあることを伝える。更に、尻振りダンスは、ダンスの基本的な型を一分間につき何回反復するかによって正確な距離を知らせることが出来、反復回数が少なければ少ない程、食べ物の距離が遠くにあることを意味する。

人間言語と動物のことばとの一番大きな違いは、本稿の初めに述べた創造性にあると言われている。つまり、動物の伝達方式は、一つの事柄、あるいは思考に限られていて、固定的であり、柔軟性がない。犬の動作にしても、音声にしても、一つの行為は一つの意味しか持たないし、いつも同じで固定している。ある創造力あふれる猫がいて、相手の猫に対して求愛の仕方を色々変えて、新しい動作をしたり、聞いたことのない音声を発した場合に、どの猫にも同じ猫という仲間だと思われずに無視されるか、ひどい攻撃を受けるであろう。

蜂のダンスは、食べ物の角度とか距離に関して無限に多くの情報を伝えることが出来るので、人間言語のように無限に変化し得ると言えよう。しかし、蜂の伝達方式も、やはりその情報が食べ物の質と方角と距離という一定の種類に限られていて、その他の情報を伝えることが決していないことから、固定的であると言える。又、ある実験者が蜂に食べ物のある所まで歩いて行かなければならないようにしたら、蜂は巣に戻って来ると、実際の距離より25倍も遠くの地点にあるようにダンスで仲間に伝えたということからも、蜂には人間言語のような創造性があるとは言えない。

4-B. 人間言語の特性

前にチョムスキーの言う人間言語の特性について述べたが、それも含めて人間言語と動物の伝達を区別する特徴を、田中春美氏(1979)に従って六つ挙げてみたい。この相違はあくまでも人間言語を中心にしてのものであって、例えばチンパンジーの側から見れば違った区別をするかもしれない。

イ. 創造性

これは前にもかなりくわしく述べたことであるが、人間言語には母音や子音の数は限られているが、その組み合わせによって、無限に多くの語を作り出すことが出来る。同時に語(形態素)の数も限られているのだが、それらを組み合わせで新しい文を無限に生み出す能力を人間は備えている。従って、今まで発したことも聞いたこともない文を話したり理解したりすることが出来る。しかし動物のことばは固定的であり創造性に欠けるものである。動物の中には音

声を組み合わせて、意味のある情報を伝えるものがあるようであるが、それは未熟な、そして限られた数のものであり、人間の創造性に比べれば取るに足りないものである。前に述べた正常な言語使用は改新的であるということを、ここでは言語の創造性と呼ぶことにする。

ロ. 転位

前にも人間言語の特性の一つとして、「刺激の統制からの自由」について述べた。人間は今直面している事柄のみならず、過去や未来の事柄についても語ることが出来る。更には、実際には存在しないものについて、又、自分の考えとは別のことについて語ったりすることも出来る。人間はこのような事柄についても自由に伝達の対象とすることが出来る特徴を持っている。これは転位と呼ばれる特徴である。

おうむが「昨日おいしい餌を有難う。とてもおいしかった。」とか、「来週海へ連れて行ってよ。」と言ったらどうであろうか。動物の伝達は、ほとんどの場合直接その周囲の場と関連がある事柄しか扱わない。例えば、蜂の食べ物を知らせる行為とか、動物の危険が迫っている動作とか、鳥が木の上で自分の領域だとうるさくさえずる鳴き声などは、今直面している事柄に対してのものである。蜜蜂が自分の発見した食べ物から巣に戻り、そのありかを仲間伝える行為を転位と呼ぶ学者もいるが、これは現在直面している一連の事柄であって、数時間後とか翌日に伝達行為を行なうことはないので、人間言語のような転位ではないと言えよう。

前に人間言語の特性の一つとして「状況に対する適合性」について述べたが、このことは転位のない動物には当然のことながらないので、特に人間と動物を区別する特徴として挙げる必要はないであろう。しかし動物も嘘をつくと言われており、状況に対する適合性があるようであるが、動物が嘘をつくのは、まず第一に強い動機づけがあるようであり、人間のように自由なものではないかも知れない。

ハ. 恣意性

意味体系を持つあらゆる伝達方式に於いては、基本的な単位はいずれも形式と意味の二つの面を持っている。例えば、英語の *tree* を取り上げてみると、その言語的形式は /t, r, i/ という音の連鎖であり、言語的意味は「木」という概念である。日本語の「木」は、その言語的形式は /k, i/ という音の連鎖であり、言語的意味は英語と同じく「木」という概念である。

[tri] や [ki] という音と、「木」という概念の間には何の関係もない。このように人間言語では、音声記号（あるいは文字記号）と伝達内容の間にはほとんど必然的な関係はない。このような場合に、音と意味の関係は恣意的だと言う。交通信号にしても、「赤」と「止まれ」・「青」と「進め」の間には何の因果関係もない。ただ社会通念として、赤色は視覚的に強烈に見えるので、「止まれ」の意味に約束として使われているにすぎない。

それに対して動物の場合は、信号と伝達内容との間には必然的な因果関係があるので、非恣

意的である。例えば、犬が歯をむき出して「吠える」という信号は、「嘸むぞ」という伝達内容と関係がある。我々の身の回りにある交通標識の中で、進行方向とかカーブを表わすものがあるが、あれらは意味との関係が非恣意的だと言えよう。

動物の言語には恣意性が全くないのであろうか。蜂が食べ物が遠ければ弧の描き方を遅くするというのはどうであろうか。物理的には図形を描き終えるのに時間を多く要すれば要するほど、食べ物の所へ飛んで行くのに多くの時間を要することになるので、蜂の行為は非恣意的だということになろう。蜂のダンスの「活発さ」と「食べ物の質」の関係についてはどうであろうか。活発さには本来、良い質とか悪い質を表わすものは備わっていないので、「活発さ」と「質」の関係は恣意的のようである。しかし、これは人間から見たものであって、蜂の世界では非恣意的かも知れない。

二. 非連続性

人真似のうまいおうむが、「お父さんがウイスキーを飲んでいる。」という文と、「お父さんがコーヒーを飲んでいる」という二つの文を話すとしよう。おうむにとってはこの二つの文は「お姉さんが昨日帰って来た。」という文と、「お母さんを美術館へ連れて行きましょう。」という文ほど違っている。これは、おうむは言語の単位を結合したり、分割したり、順序を入れ替えたりすることが出来ず、教えられたり聞いたりすることを言うだけで、それ以上のことが言えないからである。つまり、「お父さんがウイスキーを飲んでいる。」という文と、「お父さんがコーヒーを飲んでいる。」という文は、何を飲んでいるかが違うだけであるなどとは考えもしない。see-tree, sorry-worry は互いに韻を踏んでいると我々が考えるように、音を非連続的な単位に分析することは動物には出来ない。我々は cat という連続した音声を、/k, æ, t/ のように発音記号に分けることが出来る。我々は自分の知らない言語を聞いた場合には、音声の流れがかなり長く繋がっているように聞こえるが、その言語が分かってくると、いくつかの意味の持った単位に分けられるようになる。

実際は一つの連続音なのだが、それを別々の音声に分け、更にそれを再び連続音になおすことはそんなに難しいことではない。次の音声記号で書かれた文を見てみよう。

(16) a. I kept on arguing with her about it.

b. /aɪkeptənəːgjuːɪŋwiðhərəbaʊtɪt/

c. [aɪk^heptɑ̃ɪŋgiuɪnʉəθəbæ>ɪt]

(16) b. の発音は音素記号で書かれているが、言語学者は c. のように出来るだけ一連の音声に近い音声記号で書いたりもする。しかし、c. のようにいくら実際の音声に近い記号で書いても、それはあくまでも非連続の単位である。そして、一連の音声を a. b. c. のようにつづり字や音声記号で書ける者は、逆に a. b. c. から一連の音声を発することはたやすいことであ

る。

英語を知っている者であれば、次の (17) の45のアルファベットを連ねた「肺塵症」という意味の語が、いくつかの意味のある単位（形態素）から成り立っているのが分かるはずである。

(17) pneumonoultramicroscopicsilicovolcanoconiosis (肺塵症)

肺の 超 顕微鏡 の 硅粉の 火山 塵 症

動物の伝達に於いても、ある種の鳥や蝉は鳴き声の数種類を組み合わせる事が出来ると言われているが、その数はあくまでも限られたものであり、人間言語のようなものではない。

ホ. 連鎖と構造

ここで言う連鎖とは音素の連鎖のことで、音連鎖には一定の規則がある。例えば、英語の場合は子音の三つ並ぶ音素で始まる語は、最初の子音は必ず /s/ であり、二番目が /p, t, k/ のいずれかであり、三番目が /l, r, j, w/ のいずれかであるという制約がある。

- (18) p l splended, street, squeeze /skwizj/, strike,
 s - t - r - V
 k j stew /stjuw/, scribe, sprinkle, skew /skjuw/, etc.
 w

この連鎖のパターンに従っていないながら、実際には存在していない語は沢山ある。例えば、**splict** とか **strone** という語は音韻規則に従っていないながら、たまたま存在していない。これは語彙に於ける偶然の空白と呼ばれるものであり、偶然の空白なのか、それとも可能性のない語なのかは、次の例からも分かるであろう。

(19) A : My father gave me a pretty splict.

B : What is 'splict'?

(20) A : My father gave me a pretty pslict.

B : What did you say?

(19) ではBが **splict** がどんなものか知らないために「**splict** って何だい。」と聞いているが、(20) では **pslict** は英語の連鎖パターンに従っていないため聞き違えたと思い、「何と言った。」と問い返している。日本語でも同じことで、「太郎のやつ酔っぱらうといつも回りのやつをふたぐんだよ。昨夜も急にふたぎ出していやになったよ。」と言うと、「ふたぐって何だい。」と言うであろう。所が「おい、お前。俺にんごぷくしてくれなきゃ、もうぱっどぎげってしてやらないからな。」と言うと、「何だい、それ。変なことばを言うのはよしてくれよ。」と言うであろう。

音素（分節音）が音節を形成し、音節が形態素を形成し、形態素を結びつけて語や句や文を形成するが、どんな単位でも勝手に結びつけることは出来ない。構成要素の単位を形成する規則が必要である。これを構造と呼ぼう。次の (21) の語や句や文の構造は、その意味に従って

であり、特別な訓練を受けたという形跡は見られない。動物の中に伝達手段を教わる場合がある場合には、それはいくつかの固定的なものにすぎないであろう。

4-C. 類人猿の「言語」習得

次の問題は、人間に最も近いと言われるチンパンジーに人間の言語を教えられないかということである。1940年代にヘイズ夫妻がヴィキというチンパンジーに言語を教えようと努力したにもかかわらず、たったの3語、「パパ」「ママ」「カップ」しか使えなかったと言う。それも、「パパ」と「ママ」はあらゆる要求に対して使われたので、「カップ」だけがその意味通り、飲み物の要求に使われた。そこで人間の発音をそのまま教えても、チンパンジーは習得してくれないことが分かり、音声を必要としない言語で訓練したらどうかと考えたのが、次に述べる実験である。

イ. 身振り語

1966年にガードナー夫妻 (Gardner & Gardner: 1969) が、北アメリカの耳の不自由な人達の間で使われているアメリカン・サイン・ランゲージ (ASL) という手話を、約1才のワシオーという名のチンパンジーに教えた。ワシオーは22ヶ月間で30語、36ヶ月間で85語、51ヶ月間では「もっと」「食べる」「聞く」「下さい」「どうぞ」「かぎ」「あなた」「私」など132語を習得し、しかも複数のサインを繋げて使用するようになった。チンパンジーの成熟速度は人間の聴覚障害児の約2倍の速さであるが、それは2, 3才頃までであって、その後は人間の方が速く覚える。人間同志でも手話を使う耳の聞こえない児童の方が、健康児よりも言語発達が早いと言われている。それは、手話は実像性が高いこと、手話はかなりゆっくりやっても信号を正確に送ることが出来ること、更には、身振りの方が発話が容易で、相手にとって(チンパンジーの場合は観察者にとって) 識別しやすいからである。

ワシオーの言語使用はあくまでも訓練者の要求に対してのものであって、自ら進んで手話を覚えたものではない。手話を覚えたチンパンジー同志で会話が出来るのであろうか。ワシオーのように ASL の手話を習得したブイーとブルーノという2頭のチンパンジーが、ごく簡単な会話ではあるが、互いに手話を用いて話したそうである。例えば、一方が持っていた食べ物を他方がねだるというものである。しかしこの場合でも、自由に解放してやり、チンパンジー同志が習得した手話を自由に使うというところまでは発達しなかったようである。つまり特殊な環境の下でのみ、人間に教え込まれた固定的な手話を使った会話が出来ようである。

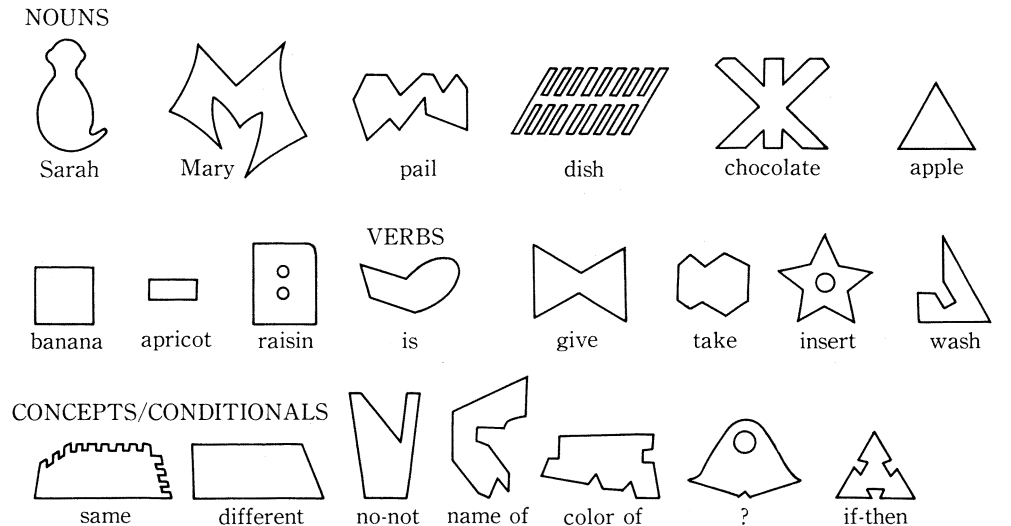
手話を習得したチンパンジーに子供を産ませ、育てさせて、その過程で親が子に手話を教える、あるいは子が親を真似て手話を習得出来るかが次の課題となる。人間による強制訓練なしに手話を子に教え、親と子、あるいはチンパンジー同志が互いにコミュニケーション活動をす

るようになれば、映画「猿の惑星」のようなことが起るかも知れない。しかし、ワシヨーは手話によって100以上の語を覚えたが、文法を習得して、文を形成するという段階にはほとんど至らなかったようである。人間言語の文字と意味関係が恣意的であるように、最近では、チンパンジーに記号の組み合わせで意味のある語を作らせる訓練が行われているが（例えば、○×で「目」、○△で「鼻」、×△で「口」のように）、問題は文形成、並びに文生成が出来るかである。

ロ. 彩片語

文構成に関する実験もある。プレマック夫妻 (Premack & Premack: 1972) は1967年に「話しことば」や「身振り」のかわりに、「書きことば」をサラというチンパンジーに教えた。サラの言語の単位は色や形や大きさの異なるプラスチック製のシンボルであった。次の(22)のようなものである。

(22) プラスチック製のシンボル



これらの小片を見ると、サラは名詞、動詞、形容詞に加え、「～と同じ」とか「～と異なる」という抽象的概念や、「否定」「疑問」を表わすシンボルさえ持っている。そして、これらのシンボルの形とそれが表わす意味とは恣意的な関係にある。サラは Sarah insert apple pail. (サラ、りんごをばけつに入れなさい) や Sarah insert banana dish. (サラ、バナナを皿に入れなさい) といった文に正しく反応するように教えられた後、今度は二つの文を結んだ Sarah insert apple pail Sarah insert banana dish. という文が与えられると、サラは二つの行為（りんごをバケツに入れることと、バナナを皿に入れること）を正しくやってのけた。次に、英語の

重文の場合に同一要素を削除するという変形規則を適用した文 Sarah insert apple pail banana dish. を与えても、サラはこの複雑な指示をやりとげて、基底にある重文を理解したことを示した。サラは間違ってるりんごとバケツとバナナの三つを皿に入れることはしなかった。このことから、サラは文を理解する際に、単語を単純に線状的に結びつけるのではなくて、人間と同じように単語を小グループ、つまり構成素にまとめていることが分かる。更にサラは、条件文「もしサラが緑の上に赤を置けば、メアリーはサラにチョコレートあげる。」という文を見れば、言われた通りに緑のカードの上に赤のカードを置いて褒美をもらったそうである。

さて、サラは人間言語が習得出来たことになるのであろうか。サラがプラスチックを言語単位として覚えたのは全く恣意的である。限られた数であったとはいえ、サラの習得した「言語」は恣意的である。それではサラが単語を小グループにまとめたこと、つまり構造を把握出来たというのはどうであろうか。サラが Sarah insert apple pail banana dish. の構造把握は、それ以前に、Sarah insert apple pail. と Sarah insert banana dish. という二つの文を覚えたことにあるようである。Sarah inert apple pail banana dish という文には、「サラ、皿にりんごとバケツとバナナを入れなさい」という意味もあるのだが、そういう行為をしなかったのは、そういう意味があるのは分からなかったのではなからうか。

言語習得の方法が、サラと人間の幼児とで決定的に異なる点は、サラの場合には新しい規則がそれぞれ念入りに計算され、人為的に制限されたやり方で教え込まれたということにある。人間の親は子供に話しかける時に、最初の数ヶ月の間は限られた数語を特定の語順で話し、命令に正しく反応するごとに子供に褒美としてチョコレートやバナナをやるようなことはしない。又、人間の親は子供が一つの文法規則を覚えてしまったから、次の文法構造に移るというようなこともしない。

ハ. 鍵盤語

1973年にランボー夫妻 (Savage-Rumbaugh & Rumbaugh: 1978) は、ラナというチンパンジーに鍵盤語を使って人間言語を習得させることを試みた。例えば、〈どうぞ・機械・ください・ジュース・終止符〉と5個のキーを続けて押した場合には、自動的にジュースが与えられるシステムになっている。1974年の訓練開始後1年2ヶ月で、ラナは訓練者と会話を始めたのである。訓練者がラナの部屋の外でコークを飲んでいる時、コークを機械に要求することをすでに習得しているラナがそれを見て、〈疑問符・ラナ・飲む・これ・の外・部屋・終止符〉(ラナは部屋の外でこれを飲んでも良いですか) という文を作った。訓練者は〈はい・終止符〉と応じて部屋のドアを開け、〈これ〉を〈部屋の外〉でラナと分けあって飲んだそうである。ラナがコークを〈これ〉に置きかえているのも注目に値する。

ラナは強制的に教え込まれたことではあるが、人間言語を習得したと言えるかも知れない。

しかし、それはあくまでも人間の幼児と比べれば取るに足りないものである。人間はチンパンジーを初めとするどの動物よりも、はるかにすぐれた分析的・総合的能力を持つ頭脳を所有しているようである。人間言語に関する限り、どんな馬鹿な人間も、賢いチンパンジーよりはるかに賢いと言える。従って、人間が習得し、用いている言語は、やはり種に特有のものであるということになる。

コンピューターによってコントロールされた鍵盤語の出現によって、今まではなされて来なかった、人のことばでではなく動物のことばで解釈することによって、動物の行動を分析することが出来れば、言語の本質が明らかにされるであろう。動物のことばは人間が考えるよりもずっと複雑かも知れないのである。

5. 言語の普遍性

我々が外国語を学ぶ際には、日本語との相違性に注目し、言語間での類似性について考えることはまずないであろう。我々は欧米人を見ると、「あっ、外人だ。」と言うであろう。それは直観として我々と違う人種だと感ずるからである。外国人も我々と同じ地球人だから同じような考え方をするなどとは思わない。今日国際化が叫ばれているが、本当の意味の国際化とは、外国人も日本人と同じように造られた人間であって、同じ考えを持つ人間だと思ふことであろう。我々が外国人に相違性よりも類似性を求める時、本当の国際化が実現するであろう。外国人は「異人」ではなく「同一人」なのである。

人間が皆等しく造られているのと同様に、人間言語も等しく造られているはずである。日本語とか英語とかアラビア語と言っても、それぞれ人間の話すことばであれば、そこには類似性が多く見られるはずである。従来は言語間の相違性に重点が置かれ、類似性、更には言語の普遍性に余り重点が置かれて来なかったようである。

世界の個々の言語の表面的な相違だけを考えると、言語が互いに無数の点で異なっており、人間の二つの言語の違いは、人間言語と蜜蜂のことばの違いと同じくらいになってしまう。ところが人間の諸言語の文法についての解明が進むにつれて、それらが基本的には類似したものであることが分かってきている。そして今日では、すべての言語の文法、あるいはほとんどの言語の文法に共通の普遍的特性が多く見い出されている。例えば、次の(23) a.~i. に述べられているようなものである。例外はあるものの、圧倒的大多数の言語が共有する特性である。

(23) a. どの言語にも母音(3個以上)と子音(閉鎖音と鼻子音がそれぞれ1個以上)がある。つまり、a, i, u, p, n のような単音がある。

b. 文の発音を決定する規則がある。(イントネーション・音声規則)

- c. 1 人称と 2 人称の区別がある。
- d. 固有名詞のない言語はない。
- e. 「男性」「女性」「母親」「父親」「生物」「人間」「具象物」等には普遍的意味特性がある。
 〈例〉 mother: [+Human, -Male, +Adult, +Married, +Parent]
- f. ほとんどの言語において、文の「主語」は「目的語」よりも前に位置する。
- g. 言語には一般に次のような意味区分を持つ語が存在する。乾-湿, 若い-年をとった, 生きている-死んでいる, 長い-短い, 男性-女性, 明るい-暗い, 等
- h. 或る言語に摩擦音があれば(ほとんどの言語にあるが,) その中には /s/ が含まれている。
- i. 唇部の閉鎖音は両唇部 (p, b, m) になり, 唇部の摩擦音は唇歯音 (f) になる傾向がある。

以上の九つの普遍的特性のうち、日本語に該当しないのは i. だけである。日本語には唇部の摩擦音 [ϕ] はあるが [f] はない。これは日本語の特殊性だと言えよう。

次の変則的な文を見てみよう。

- (24) a. My sister is an only child.
- b. That bachelor is pregnant.
- c. Colorless green ideas sleep furiously. (Chomsky: 1957)
- d. John frightened a flower.
- e. Happiness plays sumo.
- f. I feel Coke.

(24) a.~e. の文が意味的に変であることは、どの言語を話す者でも分かるであろう。それは、それぞれの語には普遍的な意味特性があり、我々は語や文の意味が本来備わっている含意を知っているからである。sister には必ず兄弟姉妹が一人はある。bachelor (独身男) は妊娠が不可能である。colorless green や green ideas というのは存在せず、sleep するのは生きものである。しかも furiously (猛烈に) のような様態の副詞と sleep は共起しない。flower は [+Animate] でない為、frighten させられることはない。play するのは sleep 同様生きものである。このように (24) a.~e. の文が変則的な文であるというのは、どの言語にも共通している意味特性によるものである。

(24) f. の I feel Coke. は宣伝文句であるが、feel という動詞は本来、feel hunger, feel pain, feel sorrow のように、目的語になるものは何らかの影響を及ぼすものである。Coke という飲み物は我々に何らかの影響を及ぼさないはずであるが、この文では我々に何かを与えてくれ

るものということになる。それは飲んだ時のスカットした良い気持であろう。これは本来の意味特性を無視した、宣伝効果を狙った文と言えよう。

我々が学校で英語を習う時には、普遍文法は教えられず、英語の持つ個別文法の規則が教えられる。例えば、文型は SVO だとか、進行形は be+ing だとか、受動態は be+過去分詞 だとか、完了形は have+過去分詞 だとか、過去には -ed をつけるとか、命令形は動詞の原形で始まること等、沢山の難しい文法規則が教えられる。難しいのは英語を第2言語として学習しなければならないことにある。それでは、日本語と英語は月とすっぽん位違うのに、なぜ我々は英語が分かるようになるのであろうか。それは日本語と英語が基本的には似ている面が多いからである。我々は一つの言語を習得することによって、すでに多くの言語の普遍性、共通性について無意識のうち知っているのである。それは言語の本質を知っていることになるので、英語の文法を理解することは全然難しいことではない。つまり、SVO とは文が主語、動詞、目的語の順になることであり、進行形とはある行為が進行していることで、日本語の「食べている」や「走っている」に当たる。受動態は主語の人物（あるいは物）がある行為を被ることであって、日本語の「なぐられる」や「笑われる」に当たり、完了とはある行為が完了したことを意味し、日本語の「食べてしまった」や「宿題を終えた所だ」に当たり、過去形はある動作が過去に於いてなされたことで、日本語の「食べた」や「来た」に当たり、命令形は人に物を要求したり、命令したりする文で、日本語の「手伝いなさい」や「起きなさい」に当たる等ということは、英語を習い始める中学生でも当然知っている事である。従って我々は実は英語を習う前に、名詞とか形容詞とか動詞とか目的語とかについてすでに多くのことを知っているのであって、そのことは改めて学ばなくても良いのである。このことが我々が第2言語として外国語を学ぶ時に大いに役立つのである。これがベーコンの言う「一つの言語の文法を知っている人は、すべての言語の文法を知っていることになり、知らないのは偶発的な相違だけである」という言葉の意味なのである。

幼児はどんな言語環境に生まれても、つまり、どこの国の幼児も同じような言語発達をなすと言われている。どの幼児も喃語期があり、それが終ると母音であれば [a]、子音であれば両唇音 [m, p, b] の [mama], [papa], [baba] のような発音をし、1語文期、2語文期、更には電報文体へと発達すると言われている。人間言語は本質的には普遍的であり、表面的な相違はその類似性に比べれば少しのものである。だから我々は難しい外国語を学び取ることが出来るのである。

6. 言語の抽象性

6-A. 言語能力と言語運用

我々は理論的には無限に長い文を造り出す能力を持っている。例えば、「私が昨日公園で会った人が好きな猫が食べた魚を売っていた奥さんのとなりのとてもとても背の高いおじさんが……云云」といった文である。しかし、実際はその運用は不可能である。それはお腹もすくし、疲れてもくるし、飽きてくるし、それに何よりも我々は無限に生きることが出来ない。これは言語知識とその知識を実際に使うことの違いのあることを示している。言語能力と実際にこの知識を使用する言語運用の違いである。これは又、何かを「知っている」ということと、何かを「する」ということは同じではないことを意味している。

ある人が自転車に乗ることを覚えた。これは知識を得たことになる。そして自転車で毎日1時間通勤していた。これは運用を行っていたことになる。ある日その人が転んだ場合、あるいは15分乗って疲れたので止まってしまった場合に、その人が自転車の乗り方を知らないからだとか、忘れてしまったからだとは言わないであろう。知識は変わらないのだが、運用に何らかの理由で支障がきたのである。言語についても同じで、ろれつが回らない位酔った旦那さんが帰って来て、何かわめいているが、奥さんは何を言っているのかさっぱり分からない。旦那さんは水が1杯欲しいのだが通じない。その時奥さんは「あなた日本語を忘れたの。忘れやすいわね。」とは言わない。

言語能力を十分に駆使する人がいて、次の文を言ったとしよう。

(25) a. The cake the woman the man the boy respected married made was very delicious.

(その少年が尊敬する男性が結婚した女性が作ったケーキは大変おいしかった)

b. I expected the dog to be believed to be watched by John by Mary.

(私は犬がジョンによって見張られるということがメアリーによって信じられることを期待した)

(25) a. と b. の文は、聞き手にとって簡単に理解できるものではない。何回か繰り返してもらうことによって、その意味が理解出来るであろう。その言語の文法規則を知っているから、(25) のような複雑な文を造り出せるし、同時にその意味が分かるのである。

我々英語教師は、学生に英語を教える際に、言語能力よりもむしろ言語運用に重点を置きすぎているのではないかと思われる。3人称現在形では動詞に -s, 過去形には -ed がつき、進行形は be 動詞が必要、形容詞も be 動詞が必要で、疑問文は be 動詞を文頭に移動する、と

というようなことである。もちろんこれらのことは大切であり、きちんと教えなければならない。しかし、これらの規則は覚えていても、実際に話す時には間違ってしまうことが多い。又、3人称の -s を落としたり、単数、複数をはっきり区別しないことも良くあることである。運用上の間違いに重点を置くと、英語に対するコンプレックスが増し、結果的にはマイナスになるであろう。それよりも、日本語と英語の共通性を強調しながら、英語という個別言語の持つ相違点を認識させることが大切であろう。

6-B. 音韻表示と音声表示

人間が言語を知っているとはどういうことなのかを、話者の持っている言語能力、つまり基本的な言語知識を記述することによって知ることが出来る。

日本語の動詞の活用は、日本語を学ぶ外国人にとっては悩みの種である。我々はもちろんそれを無意識のうちに習得してしまっている。その無意識のうちに習得した規則とは、いったいどのようなものであろうか。次の(26)の動詞形はある方言の現在形(終止形)であるが、これらの語を使ったことのない者は簡単にはその過去形が言えないであろう。

- (26) あさぐ(歩く), ねまる(座る), あいぶ(歩く), あうつ(煽る), いこす(惚れる),
おっつゝれる(叱られる), おこずく(浮かれる), おだむ(静かになる), かきしゃ
ぐ(引っ掻く), こそぐる(様子を探る) (東條:1969)

すぐには(26)の過去形が言えなくても、やがて「あさいだ」(歩いた), 「ねまった」(座った)のように正しい過去形が言えるようになる。それは基底の形に音韻規則を適用する言語能力(知識)が備わっているからに相違ない。その無意識に我々の心の中に存在している規則を、外国人は意識的に学ばなければならないところに、母国語習得と外国語習得の違いがあるのである。

我々は英語のスペリングと発音は別のもののように教えられてきた。英語の教師にローマ字のように読んではいけないと言われたものだった。しかし、音素表示よりもずっと抽象的で、実際の発音からはかけ離れている音韻表示が我々の頭の中にあり、実際に発音される音声表示を派生する規則を習得しているからこそ、正しい発音が出来るとということが生成音韻論の研究の結果明らかになっている。

次の(27)の例は抽象的なつづり字である音韻表示から、実際の発音である音声表示が派生されることを示している。(28)は(27)の語に適用される規則である。

- (27) a. 'neptune' /néptune/ $\xrightarrow{1}$ neptjune $\xrightarrow{2}$ neptjun $\xrightarrow{8}$ neptjun
b. 'adaptable' /adáptable/ $\xrightarrow{3}$ ədaptəblə $\xrightarrow{4}$ ədæptəblə $\xrightarrow{5}$ ədæptəbl̩
c. 'teeming' /téeming/ $\xrightarrow{6}$ tijming $\xrightarrow{7}$ tijming $\xrightarrow{8}$ tijmɪŋ $\xrightarrow{9}$ tijmɪŋ

- d. 'sign' /sɪgn/ $\xrightarrow{6}$ saɪgn $\xrightarrow{10}$ saɪn
 e. 'passed' /pass-ed/ $\xrightarrow{3}$ passəd $\xrightarrow{4}$ pæssəd $\xrightarrow{11}$ pæsəd $\xrightarrow{12}$ pæsd $\xrightarrow{13}$ pæst

(28) 1. "j" Insertion rule

$\phi \rightarrow j / C _ u$

〈例〉 pʊər \rightarrow pjʊər 'pure', stʊdənt \rightarrow stjʊdənt 'student'

2. Final "e" Deletion rule

$e \rightarrow \phi / \bar{V}C _ \#$

〈例〉 mejke \rightarrow mejk 'make', pajne \rightarrow pajn 'pine'

3. Schwa rule

$\left(\begin{array}{c} V \\ -\text{high} \\ -\text{stress} \end{array} \right) \rightarrow \text{ə}$

stjʊdɛnt \rightarrow stjʊdənt 'student', bɔtəm \rightarrow bətəm 'bottom'

4. "a" Fronting rule

$a \rightarrow \text{æ}$

〈例〉 aŋgər \rightarrow æŋgər 'anger', apəl \rightarrow æpəl 'apple'

5. Syllabic rule

$\left\{ \begin{array}{l} [+lateral] \text{ ə} \\ \text{ə} \left[\begin{array}{c} C \\ +resonant \end{array} \right] \end{array} \right\} \rightarrow \left[\begin{array}{c} C \\ +resonant \\ +syllabic \end{array} \right]$

〈例〉 æplə \rightarrow æpəl 'apple', stjʊdɛnt \rightarrow stjʊdnt 'student', bɔtəm \rightarrow bɔtṁ 'bottom', tɪjtʃər \rightarrow tɪjtʃr 'teacher', kenəl \rightarrow kenl 'kennel'

(‘apple’ や ‘bottle’ は (28) 2. の語尾の e を削除する規則を適用しても良いようであるが、これらは歴史的にも ‘æppel’ (OE), ‘botel’ (ME) であったことや、[æpəl], [bɔtəl] のように 2 音節に発音することもあることから、語尾の e は音節主音と見なし、‘make’ や ‘pine’ の語尾の e のように音節主音と見なされないで削除されるべきものと区別するべきである。)

6. Vowel Shifting rule

$\bar{i} \rightarrow \text{aj}$, $\bar{e} \rightarrow \text{ij}$, $\bar{æ} \rightarrow \text{ej}$, $\bar{u} \rightarrow \text{aw}$, $\bar{o} \rightarrow \text{uw}$, $\bar{ɔ} \rightarrow \text{ow}$, etc.

〈例〉 divɪn \rightarrow divajn 'divine', kēp \rightarrow kijp 'keep', kām \rightarrow kejm 'came' mūs \rightarrow maws 'mouse', fōd \rightarrow fuwd 'food', kōt \rightarrow kowt 'coat'

7. Nasal Assimilation rule

$\left[\begin{array}{c} \text{̃} \\ +nasal \end{array} \right] \rightarrow [\text{ɔpoint}] / _ [\text{ɔpoint}]$

〈例〉 fɪŋgər \rightarrow fɪŋgər 'finger', ɪmpɔsəbl̩ \rightarrow ɪmpɔsəbl̩ 'impossible'

8. Lax Vowel rule

$i \rightarrow \text{ɪ}, u \rightarrow \text{ʊ}, e \rightarrow \text{ɛ}, o \rightarrow \text{ɔ}, \text{etc.}$

〈例〉 $\text{pik} \rightarrow \text{pɪk}$ ‘pick’, $\text{put} \rightarrow \text{pʊt}$ ‘put’

9. Final “g” Deletion rule

$g \rightarrow \phi / \eta \text{ ____ } +$ [+] is a morpheme boundary.

$\text{kɪŋg} \rightarrow \text{kɪŋ}$ ‘king’, $\text{gæŋg} + \text{stər} \rightarrow \text{gæŋstər}$ ‘gangster’, $\text{sɪŋg} + \text{ər} \rightarrow \text{sɪŋər}$ ‘singer’

10. “g” Deletion rule

$g \rightarrow \phi / \text{ ____ } n +$

〈例〉 $\text{dɪzajŋ} \rightarrow \text{dɪzajn}$ ‘design’, $\text{fɔrɪŋ} \rightarrow \text{fɔrɪn}$ ‘foreign’, $\text{sajŋ} + \text{ɪŋ} \rightarrow \text{sajɪŋ}$ ‘signing’ (9と10の g Deletion が一つの規則として書かれないのは、それぞれ別の種類のものだからである。)

11. Double Consonant Deletion rule

$C_1 C_1 \rightarrow C_1$

〈例〉 $\text{hæppi} \rightarrow \text{hæpi}$ ‘happy’, $\text{ɪljɔl} \rightarrow \text{ɪljɔl}$ ‘illegal’

12. Schwa Deletion rule

$\text{ə} \rightarrow -\phi / \left[\begin{array}{l} +\text{alveolar} \\ +\text{plosive} \end{array} \right] \text{ ____ } d$

(規則は、ə は t/d の後では削除されないと読む。)

〈例〉 $\text{wɪʃəd} \rightarrow \text{wɪʃd}$ ‘wished’, $\text{græbəd} \rightarrow \text{græbd}$ ‘grabbed’

13. Past rule

$d \rightarrow t / [-\text{voiced}] \text{ ____ }$

〈例〉 $\text{wɪʃd} \rightarrow \text{wɪʃt}$ ‘wished’, $\text{kɪkd} \rightarrow \text{kɪkt}$ ‘kicked’

英語を知っているということは、以上の音韻規則を知っていることである。そうすると、つづり字がまず知覚されて我々の頭の中にあることになる。英語のつづり字から発音を予想するのは難しいと良く言われるが、つづり字を見て発音している以上、音韻規則を無意識的にしろ意識的にしろ習得しているのである。

6-C. 深層構造と表層構造

次の (29) a.~c. の文は、三つとも構造上同じように思われる。いわゆる 5 文型と言われるもののうち、SVOC に属するという点で同じである。

(29) a. I persuaded the doctor to examine John.

b. I expected the doctor to examine John.

c. I promised the doctor to examine John.

しかし (29) a.~c. はそれぞれ構造上異なるものであることが、次の (30) の構造から分かる。

(30) a. I persuaded the doctor_i [PRO_i to examine John]

私は医者に (医者が) ジョンを診るように勧めた。

b. I expected [the doctor to examine John]

私は医者が ジョンを診るのを期待した。

c. I_i promised the doctor [PRO_i to examine John]

私は医者に (私が) ジョンを診るのを約束した。

(30) a. の PRO は doctor の意味で to examine John の主語であり、c. の PRO は I の意味で同じく to examine John の主語である。PRO はそれぞれ日本語訳の () の中の語に相当するものであるが、日本語の場合にも普通は言われないものである。

(29)a.~c. の意味は、それぞれ the doctor examined John という意味内容を含んでいる。その受動文は John was examined by the doctor であるが、次の (31) の文はすべてその意味内容を含むものである。

(31) a. I persuaded John to be examined by the doctor.

b. I expected John to be examined by the doctor.

c. I promised John to be examined by the doctor.

(29) と (31) の文は、その補文に能動文、受動文という違いはあるが、examine する者とされる者との関係 (行為者と被行為者との関係) は同じである。しかし、(29) と (31) の意味は同じではなく、(31) の意味は次のようになる。

(32) a. I persuaded John_i [PRO_i to be examined by the doctor]

私はジョンに (ジョンが) 医者に診てもらおうように勧めた。

b. I expected [John to be examined by the doctor]

私はジョンが 医者に診てもらおうのを期待した。

c. I_i promised John [PRO_i to be examined by the doctor]

私はジョンに (私が) 医者に診てもらおうのを約束した。

以上の文での意味上の目的語や主語は、persuade, expect, promise という動詞によって決められるものである。日本語は助詞によって名詞の格が決められるが、次の文のように「その医者」という名詞の次の助詞を省いたらどうであろうか。

(33) a. 私はその医者 _____ ジョンを診るように勧めた。

b. 私はその医者 _____ ジョンを診るのを期待した。

c. 私はその医者 _____ ジョンを診るのを約束した。

初めは多少のとまどいはあっても、我々はすぐに主文の動詞と「その医者」との意味関係、あるいは補文の動詞と「その医者」との意味関係が理解出来る。

このことは我々はある言語を知っていると、その文のより深い抽象的な構造を把握していることを意味する。

次の (34) a. の文には will が二つあるが、疑問文を作る際に文頭に移動する will は2番目の will である。

(34) a. The woman who will come to Hiroshima will attend the meeting.

b. Will the woman who will come to Hiroshima attend the meeting?

c. *Will the woman who come to Hiroshima will attend the meeting?

b. の疑問文が正しくて c. の疑問文が間違っているという判断は、深層の文構造を把握しているからに違いない。このような文構造の把握と文の知覚について、フォダーとビバー (Fodor & Bever: 1965) はクリック実験 (Click experiment) を行なっている。

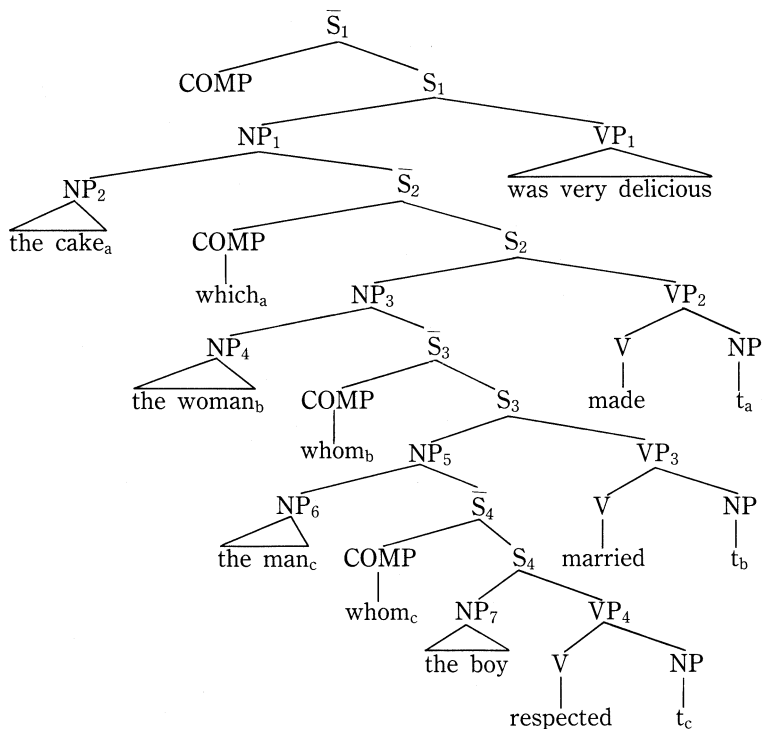
(35) That he was happy was evident from the way he smiled
 $-3 \text{ a} \quad -2 \quad -1 \quad 0 \quad +1 \text{ b} \quad +2 \quad +3$

(35) の文は 0 の位置で大きく主部と述部に分かれている。このクリック実験では、まず被験者に一方の耳から文を聞かせ、文のあらかじめ定められた位置に来た時、他方の耳からクリック音と呼ばれるカチツという物理的信号音を与えた。被験者はこれを聞き終えた直後に、紙に聞き取った文を書き、そこにクリック音が聞こえたと思われる位置を記すことになっている。

その結果、0 位置以外の位置で与えられたクリック音は、本来の位置から 0 位置、あるいは 0 位置に近づいて知覚される傾向が見いだされた。例えば、-3 の位置で与えられたクリック音は a や 0 の位置で与えられたかのように、又、-1 や +1 で与えられたクリック音は 0 の位置で与えられたように知覚されたそうである。0 位置は文の主要な切れ目であり、その位置にクリック音が引き寄せられたのである。この実験は、文の知覚に於いて統語構造が重要な役割を果たしていることを示唆している。

前に (25) a. で挙げた The cake the woman the man the boy respected married made was very delicious という文が理解出来るのも、抽象的な統語構造を知っているからである。それは次のような D-構造で表わされるであろう。

(37)



(37) の構造で COMP 内にある $which_a$, $whom_b$, $whom_c$ はそれぞれ目的格を持つものである。このように関係節の深層の構造から同一名詞句を先行詞のうしろに移動し、更に削除して表層の構造を派生する規則を知識として備えているからこそ、我々は発声される文が理解出来るのである。

7. 談話の文法

今まで述べてきた言語の分析は、どちらかと言えば形式的なものである。それはそれぞれの文構造に従って、その文に意味解釈を与えるものである。その文が文法的か非文法的かの判断を、統語的要因によってなすものである。所が、形式的分析では説明の出来ない現象も多くなる。そこで現われたのが機能文法である。

機能文法家は、機能的要因を無視した統語的説明は不自然だとする。例えば、「犬が猫を追いかけた。」という文と「猫が犬に追いかけられた。」のような能動文と受動文は追いかけるものと追いかけるものとの関係が同じなのであるが、それらは互いに論理的意味関係を共有しているのではなくて、受動文は動作の対象を主語（あるいはテーマ）に置いた文である。能

動文・受動文の使い方は談話の原則に従ったものでなければならない。次の(38)の文は良いが、(39)の文は、Aが「君のお父さん」について聞いているのに対して、Bが「俺」を主語として答えているのでおかしい。

(38) A : 君, どうしたんだい。

B : 俺, おやじに殴られたんだ。

(39) A : 君のお父さんどうしたんだい。

B : *俺, おやじに殴られたんだ。

次の(40) a.~e. のBの答えは、すべて「～は～です。」という構文であるが、それぞれ意味の異なるものである。

(40) a. A : 私は医者になりたいんですが、あなたは？

B : 私は、弁護士です。

b. A : 私の妹はケネディーを尊敬しています。あなたは？

B : 私はリンカーンです。

c. A : 彼は象が好きだと言っていました。あなたは？

B : 私はチンパンジーです。

d. A : 私はやっと先生に会えました。あなたは？

B : *私は校長先生です。

e. A : 彼は来月花子さんと結婚するそうだよ。君は？

B : *僕は恵子です。

(40) の a. は何になりたいかが問題であり、b. は誰を尊敬しているかが問題であり、c. は何が好きかが問題である。d. は会えたかどうか問題であるため、Bの答えがおかしく、e. はいつ結婚するかが問題である場合にはBの答えはおかしい。(40) e. にしても、来月結婚することが前提にあって、誰と結婚するかが問題であれば正しい文となる。つまり、e. が正しいのは「来月」が旧情報であり、誰と結婚するかが新情報の場合である。

我々はその文の意味を知っていれば、談話に於いて次の(41)と(42)のように省略規則を正しく適用出来る。

(41) a. A : 君は、1960年に生まれたんですか。

B : *はい、生まれたんです。

b. A : 君は、1960年に生まれていたんですか。

B : はい、生まれていたんです。

(42) a. A : 昨日神田迄歩いて行ったんですか。

B : はい、歩いて行ったんです。

B : *はい, 行ったんです。

b. A : 神田迄歩いて行けるんですか。

B : はい, 歩いて行けるんです。

B : はい, 行けるんです。

(以上久野 : 1978)

(41) a. は「Aの質問はBが生まれたのが1960年だったかどうか」であるため、「はい, 生まれたんです」という答えは妥当ではない。(41) b. の方は「1960年にBが生まれていたかどうか」の質問であるので正しくなる。

(42) a. では, 質問の焦点は行ったか行かなかったかにあるのではなくて, 昨日神田に行ったことは前提としてあり, それが歩いてだったかどうかにある。一方 (42) b. の方は, 行けるかどうか焦点になっている。

更に省略の問題を英文で見てみよう。

(43) a. A : Were you robbed in New York?

B : Yes, I was robbed ϕ .

b. A : Were you born in New York?

B : *Yes, I was Born ϕ .

c. A : Were you already born in 1960?

B : Yes, I was already born ϕ .

(ibid.)

(43) a. のAの質問は, 強盗に会ったかどうかという方が, “in New York” という場所よりも情報がより新しく重要度が高いので, Bの答が正しくなる。一方 (43) b. のAの質問は, 生まれたことは知っていることであり, 情報が古く重要度がより低いものである。従ってBの答えは適切ではない。このようにインフォメーションの新旧と重要度によって, 省略規則の適用が左右されている。(43) c. は生まれていたかが問題となっているので, Bのは正しい答えになる。

機能文法の1例として談話の文法に少し触れた。機能文法家と形式文法家は, 基本的には文法の規則性が機能的な(非統語的な)要因によるものなのか, あるいは形式的な(統語的な)要因によるものなのかについて, 互いに対立することがあるが, 両者は互いに相補い合っていくべきだと思う。つまり, 現在 GB 理論を中心とする変形文法を研究している学者が語用論にも目を向け, 一方語用論の研究者が変形文法に歩み寄っていけば, 従来とは別の新しい文法理論が生まれるかも知れない。

8. おわりに

人間がコミュニケーションとして使用している言語とはどういうものかについて述べてきた。抽象的でかつ複雑な人間言語を、特別な障害を持った者でない限り、自然に習得出来るということは、言語が人間に特有のものであると言える。ことばの話し方については、弁論家のように技術的訓練を受けた者、語彙の豊富な者、アナウンサーのように発声方法を学んだ者など千差万別であるが、それは言語習得後に学びとったものであり、言語知識が特別に変化した訳ではない。そのことは、自転車に乗ることを同時に覚えた二人のうち、一人は競輪の選手として毎日自転車に乗っているが、他方はたまにしか乗ることがないのと同じである。20年間外国生活をした結果、日本語をすっかり忘れてしまったということがあるが、これはあくまでも運用が出来ないことであり、知識がなくなった訳ではない。日本語の言語環境に置かれると、つまり動機付けが得られると、すぐ回復する。忘れてしまった数学や日本史を新しく学習するのは違うのである。

参 考 文 献

- Austin, J. L. 1965. *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (坂本百大訳『言語と行為』大修館 1978)
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton. (勇 康雄訳『文法の構造』研究社 1963)
- . 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press. (安井 稔訳『文法理論の諸相』研究社 1970)
- . 1980. *Rules and Representations*. Basil Blackwell. (井上和子・神尾昭雄・西山佑司共訳『ことばと認識』大修館 1984)
- . 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris. (安井 稔・原口庄輔共訳『統率・束縛理論』研究社 1986)
- . 1982a. *Language and the Study of Mind*. Sansyusya.
- . 1982b. *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. MIT Press. (安井 稔・原口庄輔共訳『統率・束縛理論の意義と展開』研究社 1987)
- , and M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. Harper and Row.
- Fodor, J. A., T. J. Bever. 1965. "The Psychological Reality of Linguistic Segments," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 4, 414-420.
- Fodor, J. A., T. J. Bever and M. F. Garrett. 1974. *The Psychology of Language: An Introduction to Psycholinguistics and Generative Grammar*, McGraw-hill, Inc. (岡部慶三・広井 修・無藤 隆共訳『心理言語学』誠信書房 1982)
- Fromkin, V. and R. Rodman. 1978. *An Introduction to Language*. Holt, Rinehart and Winsten. (梅田巖・石井丈夫・北条和明・竹村憲一共訳『言語とは何か—現代英語学への招待—』あぼろん社 1980)
- 福地 肇. 1988. 「機能文法の力とそのねらい」『月刊言語』Vol. 17, No. 10, 36-44.

- Gardner, R. A. and B. T. Gardner. 1969. "Teaching Sign Language to a Chimpanzee," *Science* 165, 664-672.
- Greenberg, Joseph H. (ed.) 1966. *Universals of Language*. MIT Press.
- 伊藤克敏. 1982. 「幼児言語研究の新段階」『月刊言語』Vol. 11, No. 1, 84-102.
- Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.
- 久野 暉. 1978. 『談話の文法』大修館.
- 松沢哲朗・浅野俊夫. 1979. 「類人猿の『言語』習得」『月刊言語』Vol. 8, No. 9, 16-26.
- McNeil, D. 1970. *The Acquisition of Language*. Harper and Row. (佐藤方哉・松島恵子・神尾昭雄共訳 『ことばの獲得』大修館 1972)
- 新妻昭夫. 1979. 「イヌのことば・ネコのことば」『月刊言語』Vol. 8, No. 9, 8-15.
- Premack, A. J. and D. Premack. 1972. "Teaching Language to an Ape," *Scientific American* 227, 92-99.
- Savage-Rumbaugh, E. S., and D. M. Rumbaugh. 1978. "Linguistically Mediated Tool Use and Exchange by Chimpanzees," *Behavioral and Brain Science* 4, 539-554.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Act*. Cambridge University Press.
- Steinberg, D. 1982. *Psycholinguistics: Language, Mind and World*. Longman. (国広哲弥・鈴木敏昭共訳 『心理言語学—思考と言語教育—』研究社 1988)
- 田中春美. 1979. 「人間のことば・動物のことば」『月刊言語』Vol. 8, No. 9, 2-6.
- 東條 操. 1969. 『全国方言辞典』(29版). 東京堂.